

## 2021年9月27日 聖書朝礼

「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。』」

～ マタイ 1.18～21 ～

全校の皆さん、おはようございます。

今日は、聖書の登場人物の一人である聖ヨセフの話をします。

ヨセフについての聖書の記事はとても短く、目立った活動もそれほどありませんが、よく読んでみると中々魅力のある人物です。先ほど読まれた聖書の箇所「ヨセフは正しい人であった」というところと「マリアの事を表ざたにするのを望まずひそかに縁を切ろうと決心した」というところをよく見るとヨセフの人柄が分かります。ヨセフの正しさは身ごもったマリアと縁を切ることでした。しかし、ヨセフの寛大さと温かさが表れます。マリアの事を人前で非難したり律法に訴えたりせずにひそかに縁を切ろうと決心したからです。

また、ヨセフは開かれた心の持ち主でした。夢に天使が現れたときにその言葉を受け入れます。マリアの夫になりイエスの養父になったヨセフの道のりは険しいものでした。身ごもったマリアと長い旅をしなければなりませんでしたが、なにより、生まれたばかりのイエスを殺そうとするヘロデから逃げないといけなかったです。その際にはナザレという町に逃げてヘロデが死ぬまで隠れて生活したと聖書は記していますが、今の言葉で言えば「難民」ですね。命の危険を感じベツレヘムから逃げて自分たちの住み慣れた故郷にも戻れずナザレという新しい場所で難民として生活したということです。そういえば先週の土曜日には国連難民高等弁務官事務所で活動している方の、難民についての講話にズームで参加してみました。対象は主に中高生大学生でしたが社会人もちらほら見えました。私にとっては講話よりは参加していた中高生たちの聞く姿勢に感心しました。質問も多かったですが、目を光らせ顔きながら積極的に聞いていました。

聖ヨセフの話に戻りますと、聖ヨセフは神様に正しい人として評価され、人々には誠実な人、勇気のある人、創造力のある人、やさしい人、大工としての労働者、信仰深い人と呼ばれ尊敬されています。

私たちが平凡な日々の中で経験する大小様々な来事を聖ヨセフのように誠実に向き合ひましょう。正しさの中でも人の事を大切にできる優しい心を忘れず周りの人と接していきたいですね。

さて、今日から普通の対面授業に戻りましたが、まだ緊急事態宣言下での生活は続きます。引き続きコロナのマナーをしっかりと守り、コロナに対しての緊張感を保ちながら学業に励み、仲間と楽しいスクールライフを送ってください。

